VIEW'S REPORT

教育再生実行会議委員の知事たちが語る

地方における教育の重要性、学校教育が担う役割とは

2013年1月に始まった「教育再生実行会議」は、現在の教育課題に対してさまざまな提言を行ってきた。今号では、その委員である高知県の尾﨑正直知事と、熊本県の蒲島郁夫知事に、同じく委員であり、東京都立高校の校長を務めた経験のある鈴木高弘氏が、知事らの教育にかける思い、自県の教育行政について話を聞いた。

聞き手

専修大学附属高校理事

鈴木高弘

すずき・たかひろ

◎東京都立高校教員として、定時制、単位制、島嶼（とうしょ）部など多様な高校に33年間勤務。指導困難校の1つだった東京都立足立新田高校の校長に赴任し、再建に尽力した。主著に『熱血！ジャージ校長奮闘記』（小学館）。

KOCHI

学校、家庭、地域、行政が一体となり子どもたちの知徳体を育んでいく

高知県知事 **尾﨑正直**

Uターン、Iターンの促進も鍵を握るのは教育の充実

鈴木　高知県は5つの基本政策に基づき取り組みを進められていますが、その1つに「教育の充実」を掲げられています。尾﨑知事は教育についてどのような考えをお持ちですか。

尾﨑　本県に限らず、地方行政のあらゆる根幹にあるのが教育であり、学校ではないでしょうか。

本県は、基本政策の1つめに「産業振興計画の推進」を挙げています。その理由は、1990年に全国でもいち早く人口の自然減少が始まっていたからです。知事に就任した当時、全国的に景気は回復していましたが、その中においても本県は、人口減によって県内市場が縮小し、有効求人倍率は全国と比べて厳しい状況が続いていました。その負のスパイラルを断ち切るため、地産地消だけでなく「地産外商」を掲げると共に、観光資源を発掘し、県外からの観光客を増やそうとしました。しかし、モノが売れ、観光客が来たとしても、少子化や過疎化により、担い手が限られているために、規模拡大のチャンスを逃してしまうことになりかねません。

そこで、県内の人材育成強化だけでなく、県外からの移住促進に努めていますが、その時に重要なポイントとなるのが学校です。移住希望者に必ず質問されるのは、地域に良い学校があるかどうかです。本県に魅力を感じていただけても、子どもを安心して育てられる環境がなければ移住を決断してくれません。教育の充実というのは、産業を担う人材の育成はもちろん、Uターン、Iターン促進にもつながると認識しています。

どんなに小さくても小学校は地域に残したい

鈴木　地域と学校は深く結び付いているものですが、中山間地域が多い

高知県では、過疎化による学校の統廃合は大きな課題かと思います。

尾﨑　学校の統廃合は、少子化、過疎化が進む中で地域にとって避けては通れない課題です。ただ私は、地域の学校は出来る限り維持することが必要ではないかと考えます。地域に学校がなくなれば、子育てが出来なくなり、働き手となる若い世代が住めなくなります。地域再生のためにも学校は必要です。一方、中学校や高校になると、社会性を育み、仲間と切磋琢磨する場であることも重要になるので、一定規模が必要と考えます。ただ、通学の便などを考えると、統廃合にも限界があります。このような小規模校の課題解決の手段として、ＩＣＴの活用が考えられると思います。普段はインターネットなどで交流し、長期休業時に直接会って交流する。小規模でありながら大規模校と同じような他者との交流が出来ます。ＩＣＴは地域という制約を超えて、子どもの可能性を広げる手段になると考えます。

鈴木　県内で人材育成をするためには、大学教育や社会人教育も重要になると思います。

おざき・まさなお◎高知県・私立土佐中学・高校、東京大経済学部卒業。大蔵省（現財務省）入省。外務省在インドネシア大使館書記官、財務省主計局主査、同理財局計画官補佐、内閣官房副長官秘書官等を歴任後、2007年、高知県知事に就任。現在２期目。教育再生実行会議委員、内閣府子ども・子育て会議委員等も務める。

尾﨑　県内の大学には社会科学系の学部が少ないため、県外の大学に進学し、そのまま帰ってこないという問題がありました。そこで、２０１５年度、高知工科大に経済・マネジメント系の学部を設置する予定です。更に、教育力強化のため、高知県立大を設置する法人との統合も行います。社会人教育としては、「土佐まるごとビジネスアカデミー」を産学官連携で運営しています。受講生は延べ１６００人以上に上り、社会人教育のニーズを感じています。

変化の激しい時代だからこそ幅広く学ぶことが重要

鈴木　日本全体のみならず、地域の発展にはグローバル化が欠かせません。尾﨑知事は財務省時代にインドネシアの大使館に赴任されていますが、その経験からグローバル人材に必要なことは何だと思われますか。

尾﨑　インドネシア政府で活躍している人、世界各国から大使館に派遣されている人と交流していて痛烈に感じたのは、世界で活躍している人は、文理の区別なく、実に幅広く勉強しているということです。数学を専攻しながら並行して法律を勉強してきたという人、工学が専門だが歴史にも詳しい人。それも、ただ詳しいだけでなく、大半の人がｐｈ．Ｄ（博士水準の学位）を修得していました。

鈴木　小学校での英語の教科化が検討され、中高では英語の授業は英語で行う方針が出されています。そのため、グローバル人材の育成というと、英語力向上に目が行きがちです。

尾﨑　確かに英語力は大切です。特に聞く・話すは重要であり、この力がなければ直接のコミュニケーションが出来ません。私も留学時代、だいぶ苦労しました。ただし、会話が成り立っただけでは意味がなく、海外では自分で導き出した考えを発信していかなければ、相手にされません。ですから、外国人と渡り合うためには独創性や創造性が必要であり、それらは幅広い知識や教養があってこそ生まれるものです。

　また、幅広い知識や教養は、何もグローバル人材だけに求められるものではないと考えます。社会の変化、技術の進歩が激しい中、いかに専門的な知識、実践的な技術を持っていたとしても、それらはたちまち陳腐

化してしまいます。でも、幅広い知識や教養があれば、専門分野を貫きながらも、社会の変化に対応していくことが出来るでしょう。

将来の目標をある程度決めている高校生もいるでしょう。そのような生徒には、その分野や関連する科目だけを勉強していてはかえって将来の可能性を狭めてしまうと言いたいです。一方で、目標がまだ定まっていないならなおさら、どの教科も満遍なく勉強して、自分の道が決まった時に備えてほしいと思います。

教育委員会で算数・数学、国語の教材を開発

鈴木　教育の充実という面の具体的な取り組みを教えていただけますか。

尾﨑　私が知事に就任した2007年に文部科学省「全国学力・学習状況調査」が初めて実施されましたが、その結果を見て、正直、驚きました。小学校・中学校とも全教科が全国平均を下回り、特に中学校は全国平均群からかなり低い正答率でした。子どもの学習状況を分析すると、宿題をする割合が低く、家庭学習時間が他県に比べて少ないことが分かりました。また、08年の体力テストの結果は全国でも最低水準にありました。

早速、「学力向上・いじめ問題等対策計画」（以下、緊急プラン）を策定し、08年6月にさまざまな取り組みを始めました。力を入れた取り組みの1つが算数・数学の教材開発です。単元ごとに一人ひとりの習熟度合いを把握・分析して指導し、学習内容の確実な定着を図るため、小単元のテストを教育委員会が作成しました。初年度は中学1～3年生、翌年は小学校にも拡大しました。また、授業や家庭学習で活用できる算数・数学や国語の学習シートも作成し、全小中学生に配布しました。これは、団塊世代の大量退職によって若手教員が増える中、経験の浅い先生でも一定の指導が出来るようにしたいという理由もありました。

良き社会人として送り出すための高校教育を

鈴木　学校現場と共に進めた取り組みの手応えはいかがですか。

尾﨑　何よりも先生方の熱心な指導があり、「全国学力・学習状況調査」の正答率は、年々上昇しています。小学校では国語・算数ともに全国平均に達し、中学校では全国平均との差がかなり縮まってきています。

このように一定の成果が出たことを受け、12年4月から「高知県教育振興基本計画　重点プラン」（以下、重点プラン）を推進しています。緊急プランは問題への対症療法的な面がありましたが、重点プランは知徳体の課題全般にアプローチする骨太な内容です。本県では不登校出現率や非行率、中退率が、全国に比べて高い状況にあります。最初にあらゆる政策の根幹に教育があるとお話ししましたが、学力と共に、それらの課題の背景には家庭の経済的な厳しさ、つまりは県の産業の停滞があります。産業振興を図って家庭環境の改善に結び付けると同時に、学校、地域、行政が力を合わせて子どもたちを育み、志を持って社会に羽ばたけるような教育に取り組んでいます。

鈴木　高校教育についてはどのような取り組みをお考えですか。

尾﨑　高校は社会に出る最後の教育段階です。小・中学校の学習内容を十分に習得できていないまま高校に進学する生徒もいます。また、基礎学力調査で就職も厳しいと思われる学力層の生徒が、本県では多いことも把握しています。将来の高知や日本を牽引する人材の育成も重要ですが、社会人になる準備をしっかりすることが高校教育の役目だと考えます。そして、それは学力だけでなく、健康教育や防災教育など知徳体全てにかかわることです。健康に気を使い、我が子の教育もしっかり考えられる。そういう良き社会人に育てて送り出すことが、社会から期待されています。これまでは義務教育に注力してきました。今後、高校の課題にもしっかり取り組んでいきます。

KUMAMOTO

「逆境の中にこそ夢がある」誰もが持つ無限の可能性を支援する

熊本県知事 **蒲島郁夫**

家庭の経済力による教育の差が出ないよう支援

鈴木 教育再生実行会議で活発な議論がなされる中、蒲島知事も多くの提言をされています。教育にどのような思いをお持ちでしょうか。

蒲島 蒲島県政が目指すのは、「貧困の連鎖を教育で断ち切る」ことです。

私は貧しい家庭で育ち、小学生の時から高校卒業まで新聞配達のアルバイトで生計を助けてきました。高校時代の成績はいつも２２０人中２００番台の落ちこぼれで、大学進学など頭にはなく、高校卒業後は農協に就職しました。ところが、ずっと抱いていた牧場経営の夢をかなえようと、21歳の時に農業研修生としてアメリカに渡ったのが転機となりました。勉学の面白さに目覚め、ネブラスカ大に入学して畜産学を、ハーバード大大学院で政治経済学を学びました。そして、帰国後は筑波大や東京大の教授となったのです。

このような私自身の経験から、家庭環境や学業成績に関係なく、誰にでも可能性は無限大にあると感じています。そして、夢を持ち、その夢をかなえるための一歩を踏み出すことが重要だと思います。蒲島県政ではそれを具現化する施策を行っています。

鈴木 具体的にはどのような取り組みでしょうか。

蒲島 １つは、生活保護世帯の子どもに対する支援と、１人親家庭等への支援に精力的に取り組んでいます。生活保護世帯の大学進学者に対する生活費の無利子貸付や、１人親の就労支援などです。熊本県立大には、生活保護世帯の生徒の推薦入学枠を設置しました。先日、その制度で入学した学生の１人から手紙をもらいました。そこには、「大学進学を諦めていましたが、チャンスをいただき、その期待に応えようと、一層頑張れました。おかげで、良い成績を残すことが出来ました。ありがとうございます」と書かれていて、とてもうれしく思いました。

私自身、アメリカでの大学の学費や生活費の大半を、大学の奨学金で賄っていました。そうした経験から、夢を持つ人を社会全体で後押しする制度が全ての子どもの可能性を広げると考え、この施策に力を入れています。

農業研修生として訪れたアメリカで勉学に目覚める

鈴木 蒲島知事は、教育再生実行会議でも夢を持つ重要性を訴えられていますが、ご自身はどのような夢を持たれていたのでしょうか。

蒲島 私は読書が大好きで、小学生の時から小説や偉人伝などを読んでいました。主人公は夢に溢れて魅力的で、私に知らない世界を教えてくれるのが楽しくて仕方ありませんでした。その影響で３つの夢を持つようになりました。１つめは小説家に

かばしま・いくお◎熊本県立鹿本（かもと）高校卒業後、地元農協に就職。21歳で農業研修生として渡米。それが転機となり、ネブラスカ大農学部に入学。ネブラスカ大大学院修士課程修了後、ハーバード大大学院博士課程に進学し、政治経済学で博士号を修得する。帰国後、筑波大教授を経て、東京大教授に。2008年、熊本県知事に就任。現在２期目。東京大名誉教授。

なること。本が好きだから自分も小説を書きたいと思いました。2つめは政治家になること。プルタークの『英雄伝』を読み、ジュリアス・シーザーのような素晴らしい政治家になりたいと思いました。3つめは大草原で牛を飼うこと。いつも本を読んでいた丘から見える阿蘇山のふもとで牧場を経営したいと思いました。

鈴木 ただ、夢を持っていても、「自分にはその力がない」「どうせかなわない」と踏み出せない人もいます。

蒲島 私は財産も学歴もなく、失うものが何もないからこそ、牧場経営を夢見て、アメリカ行きにチャレンジできたのだと思います。

実は、農業研修はかなり厳しいものでした。牛や羊に餌をやったり、畜舎の掃除をしたりと、朝から晩までずっと重労働でした。また、牛や羊の健康管理や出産の世話など、生き物相手の仕事は想像以上に難しいものだと分かりました。自分には牧場経営が務まらないと挫折しそうでした。しかし、研修の終盤にあったネブラスカ大での学科研修で、私の人生観が大転換しました。牧場での体験を思い出しながら、その裏付けとなる理論を学ぶことによって、牧場での体験の意味が身に染みてよく分かり、初めて夢中になって勉強したのです。

鈴木 落ちこぼれだった生徒が、勉学に目覚めたわけですね。

蒲島 「もっとここで勉強したい」と思うようになり、私の夢は大学進学に変わっていきました。もちろん、そこには大きな壁がありました。1つはお金の問題、もう1つはSAT（大学の入学試験）です。

農業研修担当のクリントン・フーバーさんに相談したところ、翌年の研修で日本語通訳として雇ってくれることになりました。私は通訳の仕事で当面の生活費を稼ぎながら、勉強に取り組みました。フーバーさんの期待に応えるためにも一生懸命に頑張ったのですが、現実は甘くはなく、試験は不合格でした。日本に帰るしかないと諦めかけていた時、私が通訳を務めていたジョー・ハドソン先生が、私が予想以上に頑張っている姿を見て、助け舟を出してくれました。驚いたことに、入試担当官に私を入学させるように直談判してくれたのです。その結果、なんと仮入学となりました。私は24歳で大学生となったのです。

期待に応えたい！という思いで120％の努力を

鈴木 入学を直談判してくれた人がいる上に、不合格だった人を入学させてくれるなんて、日本では考えられないことです。

蒲島 アメリカには、年齢や人種に関係なく、夢に向かって一生懸命に頑張る人を応援する気質があるのでしょう。私も大勢の人に支えられてここまで来られました。

ただ入学できたとはいえ、成績が悪かったら即退学という条件付きでした。でも、自分が待ち望んだ勉強の機会が与えられたのです。更には、ハドソン先生の期待を裏切ることは絶対に出来ません。崖っぷちにあったからこそ、私は真剣に勉強に取り組めたのだと思います。農学の専門書はもちろん、生物、化学、数学などの一般科目の教科書も分厚く、当然、英語で書かれているため、私は授業を録音し、家でカセットテープを何度も聴きながら復習しました。高校時代に落ちこぼれだった私が、「やってやろう！」という前向きな気持ちで猛勉強したのです。

鈴木 1学期の成績はどうだったのでしょうか。

蒲島 自分でも驚きの「ストレートA」でした。日本の大学でいうと「全て優」です。農学部にいる約400人の学生の中で、「ストレートA」はたった10人でした。おかげで、正式に入学が認められただけでなく、特待生となりました。特待生にはいくつかの奨学金が与えられ、1年生から指導教授が付いて好きな研究に取り組めます。私の人生は大きく開けていきました。

夢を持つことは大切です。でも、夢を持つだけでは何も起こりません。夢に向かって一歩踏み出す。そして、ここぞと思った時には120％の努力をする。それが、次のチャンスにつながるのではないでしょうか。

グローバルマインドと英語力を中高段階から育てる

鈴木 政府はグローバル人材の育成を推進しています。熊本県の施策ではご自身の経験がどう生かされているでしょうか。

蒲島　若い時に留学などで異文化を体験すること、中高の段階から実践的な英語力を強化することが大切であると考えています。アメリカのモンタナ大への高校生の短期派遣や、長期留学者に対する支援金の給付など、高校生の海外留学や海外大学への進学支援をしています。

　代表的な取り組みは「海外チャレンジ塾」です。海外進学などを目指す中高生を対象に、英語力や英文エッセー作成能力などの英語力向上を支援すると共に、国際的に活躍している方や海外の大学を卒業した方の講演会などを開き、グローバルマインドの育成にも努めています。

　また、中学生を対象とした英語音声教材のCDを製作し、全中学生に配布しました。私自身の経験から、中学3年生程度の英語力がしっかり身に付いていれば、外国人とのコミュニケーションは十分取れると考えています。

鈴木　「海外チャレンジ塾」の受講生のうち、2013年度は5人が海外の大学に進学と、成果が早くも表れているようですね。

蒲島　将来の熊本のため、日本のため、世界を股に掛けて活躍することを期待しています。熊本から海外の有名大学に進学したり、世界で活躍する人物がいることは、県民にとって誇りに思えますし、何よりも子どもたちに夢を与えます。海外進学は人材の流出ではなく、大勢の後進を育てることにつながると考えます。「海外チャレンジ塾」の開講式で、私は英語でスピーチをしました。生徒が真剣に耳を傾けて聞く姿に頼もしさを感じると共に、こちらも一層頑張らねばと元気をもらいました。

　また、グローバル人材の育成は、英語に特化した課題ではありません。海外で求められるのは、秀でた専門性を複数持つユニークな人物です。英語力に加えて、数学、歴史、科学、スポーツなど、他分野でも優れていることが必要です。学校教育において、学校全体で取り組んでいただきたいと思います。

　更に、社会人でも夢と意欲があれば学ぶことが出来る制度も必要と考え、県職員の海外研修派遣や東京大大学院などでの学位取得も支援しています。

鈴木　私立高校への支援にも力を入れているとうかがいました。

蒲島　熊本県の高校生のうち約3割が、私立高校に通っています。私立学校も公立学校と同様に支援していこうと、私学振興課を設置しました。更に、私立高校の横のつながりを強化するために「熊本時習館構想」を始めました。各校それぞれに建学の理念や文化があり、県の関与を受けたくないと反発があるかと思いましたが、今では講演会や教職員研修など、連携して教育活動を進め、生徒が切磋琢磨する場となっています。

逆境だからこそ、夢を持ち、踏み出す素晴らしさを伝える

鈴木　就任以来、県内の小中高の各校を訪問し、「知事出前ゼミ」を開いているとお聞きしています。

蒲島　2013年度までに57回行い、約3万人の子どもたちに語り掛け、触れ合ってきました。私の経験を踏まえながら、「人生の可能性は無限大である」「逆境にこそチャンスがある」「夢を持ち、夢に向かって一歩を踏み出す」「踏み出したからには、120%の努力をする」という4つのメッセージを伝え続けています。今の状況が悪いからといって、決して悲観することはありません。逆境だからこそ、大きな夢にチャレンジでき、将来の喜びは2倍にも3倍にも大きくなるのです。

　教育は夢をかなえる舞台の1つです。教育や社会のあり方がその方向性に沿っていなければ、政治の力でつくり出すことが重要ではないでしょうか。熊本県はこれからも、子どもたちの夢を育み、夢を大きく広げ、夢を支えることに力を注いでいきます。